

リーダー（英語・日本語）のための ストーリー原案大賞

結果発表

コスモピア株式会社は、2022年11月に会社設立20周年を迎えました。その記念企画として、英語と日本語の多読用の電子版リーダー制作を本格的にスタートすることにいたしました。より面白いフィクションのリーダーを制作するためにストーリー原案大賞を創設し、楽しく読めるフィクションのストーリー原案を2022年、『多聴多読マガジン10月号』で募集しました。

その結果を発表いたします。下記に紹介するサイトで、講評などの詳細を紹介します。

入選作品をリーダーにしたものは、一部、2023年4月号でご紹介する予定です。

また第2回の募集要項も4月号で発表する予定です。

●**最優秀賞** 該当作品なし

●**入選**

<英語 / 日本語部門> **クルーズ船観光ガイド** Tonina (鳥取県)

<英語部門> 該当作品なし

<日本語部門> **坂道の後ろ姿** P. スティーラーズ (神奈川県)

●**佳作**

<英語部門> **真夜中の朝食** 湖條登四季 (愛知県)

<日本語部門> **横浜のメリー** 福井美菜 (愛知県)

応募 要項

- ・英語 / 日本語のリーダーの原案を募集しました。
(Wordなどのテキストデータ：手書き不可)
- ・応募部門： (A) 英語リーダー (B) 日本語リーダー
(C) 英語 / 日本語リーダー共通
- ・ジャンルは「フィクション」のみです。
- ・(A) ~ (C) とも、日本と英語、両方での応募が可能。

審査講評

50音順

熊沢敏之 元筑摩書房代表取締役。筑摩書房では、ちくま学芸文庫編集長、高等学校用国語教科書編集長などを歴任。現在、法政大学・立教大学兼任講師。

「坂道のうしろ姿」

梗概を読むだけで、抒情的なすぐれた作品だと感じとれる。50年前の恋と現在の恋が二重写しになって、なにやら幻想小説のような趣だ。時代をワープさせるものとして「金木犀の香り」という共感覚が使用され、効果的。

「クルーズ船観光ガイド」

東アジアでは固有名に漢字があてられる。表意文字の名前の意味を、英語文化圏の人に伝えようとするとき、それは面白くもあるけれど、また厄介でもある。実際にどういう名前をどう取り上げるかが作品化のカギだろう。

新城宏治 株式会社エンガワ代表取締役。元アルク日本語教育部門取締役取締役。30年以上の語学教材の編集経験があり、特に日本語教育の分野に造詣が深い。

「坂道のうしろ姿」は、時間を超えて伯父さんと主人公の恋心が重なり合うというストーリー構成が秀逸です。最後の言葉は何だったのかと読者の想像力を掻き立て、先を読んでみたいと思わせる作品でした。

「クルーズ船観光ガイド」は、表意文字である漢字を題材にするという目の付け所が素晴らしいと思いました。さまざまな国や背景を持った登場人物と漢字を絡めていけば、面白い話がいろいろと展開できるのではないかと思います。

古川昭夫 SEG代表、数学科／英語多読科総括責任者。SSS 英語多読研究会理事長。2006年『多聴多読マガジン』創刊時から企画協力・執筆。

「坂道の向こう側」

過去の恋を引きずる男性と、過去にはこだわらず、現在・未来に生きていこうという女性とのすれ違いは普遍的かと思います。このすれ違いのあたりを上手くふくらませば、読みがいのあるストーリーになりうるでしょう。

「クルーズ船観光ガイド」

立派な国際旅客ターミナルの新設は税金の無駄遣いかと思いますが、伝統文化である「習字」を外国人に伝え、漢字の名前の意味を通じて国際交流をはかるといのは話は面白いと思いました。いろいろな名前のいろいろな性格の子を登場人物とすることで、GRシリーズがつかれそうです。

山田敦子 元NHKアナウンサー・アナウンス室長。報道、情報番組などを担当。現在、NHK放送研修センター専門委員。本プロジェクトにはライター兼ナレーターとして参加。

「坂道の向こう側」

現在と過去、叔父と甥の事情が二重写しとなって、不思議な浮遊感のある作品でした。後半の舞台が京都なもの雰囲気があります。文体が良く、作品化されるのが楽しみです。

「クルーズ船観光ガイド」

外国人の名前に漢字を当てはめて贈ったり、習字を体験してもらったりという日本流のおもてなし。高校生が挑戦するのが良いと思いました。出会いの数だけ作品が生まれそうです。

入選作品 1

<英語 / 日本語部門>

クルーズ船観光ガイド

Tonina（鳥取県）

◆状況設定

日本の田舎に住む高校生が、クルーズ船観光ガイドをして、様々な国の人々との出会い、その人の名前の由来や、漢字を通して、さまざまなことを学び、成長する物語。

◆登場人物

百華……………クルーズ船観光ガイドのボランティアをすることになった17歳（**ももか**）の高校生。特技はテニスだが、ケガをして部活を休んでいる。和菓子と抹茶が大好き。百華の名前は「何百もの満開の花が咲きほこっている様子」という意味を持つ。

太郎……………百華のおさななじみ。百華と週末、観光ガイドをする。小学生時代、書道を習っていた。

◆あらすじ

百華は日本海を望む田舎町に住む。コロナ禍でひっそりと、立派な国際旅客ターミナルが完成し、今では大型クルーズ船が毎週末のように寄港する。

ある時、観光ガイドにならないか、と知り合いから誘われた。百華が初めて案内することになったのは、エマというアメリカ人。彼女は漢字に興味を持ち、書道体験がしたいという。幼馴染の太郎を引っ張り出して、百華はエマと書道をする。エマは「自分の名前の漢字が欲しい」という。そこで百華が、「えま」という音に漢字をあてるには何パターンもある、というとエマは驚く。百華の名前の由来にもエマは感動する。彼女は外科医で、中米系の移民の子どもとして努力して医者になったという。「恵まれた才能に、磨きをかけ、研究を続け、患者さんに還元したい。」努力家のエマは「恵磨」という漢字を百華と太郎と一緒にいろんな候補から選び抜く。

太郎は、自宅の一室を習字教室にして、クルーズ客に体験してもらうようにした。百華は漢字辞典で調べ、意味を英訳する役。時には英語力不足で誤訳するときもある。

チェコから来た科学者のトーマス（頭真澄）、イタリア人の夫婦、中国の名づけ文化を教えてくれる夫婦、様々な国の名前をめぐる文化・歴史や、その人なりのこだわりが見え、この経験は最高に楽しいと百華と太郎は感じる。

入選作品 2

<日本語部門>

坂道の後ろ姿

P. スティーラズ（神奈川県）

◆状況設定

現代日本。「ついに結ばれなかった運命の人の最後の言葉を知りたい」という伯父の依頼を受けた青年が適当な調査を始める。

◆登場人物

枢……………現実逃避癖あり。無職。極端な面倒くさがり。探偵か詐欺師に（くるる） になりたい。20代前半。

伯父……………資産家。70代。人生の黄昏を迎え気分は晴れない。

◆あらすじ

枢は伯父に呼び出され秘蔵の高級ワインをすすめられる。「このところ毎晩同じ夢を見る。50年以上昔心を奪われた少女の夢。彼女は終始無言で、最後に言葉をかけてくれるのだが、目が覚めると覚えていない。実は昔現実にその言葉を聞いた記憶がある。その言葉をどうしても知りたい」伯父は一枚の絵を見せる。鉛筆で描かれた少女のうしろ姿。

伯父は思い出を語る。学校は丘の上にあり、ある夜ただ一度だけ少女と二人で街へ向かう坂道を下った。金木犀の香りが漂っていた。坂道が終わると少女はこちらを見ないまま何事も眩き小走りに闇に消えた。その話を当時共通の友人であり、画家志望の女性にすると、この絵を描いてくれたと。

枢は自らもたぶん結ばれる見込みのない恋をしていることもあり、伯父の依頼に興味を持つ。とりあえず絵を描いた人に会ってみようか。その人は今京都に住んでいるそうだ。そういえば枢の思い人も京都にいる。

京都で老女流画家に会う。「言葉に出さなくとも伯父さまがあの人に思いを寄せていることはわかっていました。あの人にもそれは伝わっていたでしょうが、他に心に決めた方があったのかもしれませんが。いいえそうではなくて、あの方は常にここは自分の居場所ではないと、この世は愛に応えるにはあまりにも汚れていると感じていたのではないかと」「愛でさえもですか」「愛でさえも。あの子の印象はただただ歩み去るうしろ姿なのです」

画家の家を出て坂道を下る。恋がなぜ結ばれなぜ結ばれないのか、思いにふけりながら。そこは観光地である有名な坂道。枢は雑踏の中自らの慕う人のうしろ姿を見つける。声をかけると女は振り向き何かを言うが、周囲の喧騒で聞き取れない。喧騒が頂点に達したと思うと、周囲が金木犀の香りの漂う50年以上前の坂道に変わり…

「その言葉を聞いてきましたよ」「ふむ」「『別の世界では必ず』と」「そうかなあ」「そうですとも」 枢は伯父のグラスになみなみと酒を注ぐ。